

皇女總覽(十六)——時子内親王、柔子内親王、高子内親王(仁明天皇皇女)——

皇女研究会

時子内親王・柔子内親王

時子内親王、柔子内親王は滋野繩子を母に持つ同母姉妹である。まず長大ではあるが『文徳実録』仁寿二年(八五四)二月八日条に記されている、内親王たちの外祖父・滋野貞主の卒伝を挙げたい。

参議正四位下行宮内卿兼相模守滋野朝臣貞主卒。貞主者。右京人也。曾祖父大学頭兼博士正五位下榑原東人該通九經。号為名儒。天平勝宝元年為駿河守。于時土出黄金。東人採而献之。帝美其功曰。勤哉臣也。遂取勤臣之義。賜姓伊蘇志臣。父尾張守從五位上家譚。延暦年中賜姓滋野宿祢。……

滋野氏の旧氏姓は「榑原造」だったが、貞主の祖父・東人の黄金献上の功によつて伊蘇志臣(勤臣)と賜姓され、更に貞主の父・家譚の代に「滋野宿祢」を賜った。『三代実録』貞観元年(八五九)十二月二十二日条の滋野貞雄(貞主弟)の卒伝(注1)に拠れば、それは延暦十七年(七九九

八)のことである。また「朝臣」姓を賜つたのは『公卿補任』承和九年(八四二)の貞主の項に拠ると、弘仁十四年(八二三)のことである。

……貞主身長六尺二寸。雅有度量。涯岸甚高。大同二年奉文章生試及第。弘仁二年為少内記。六年転為大内記。十一年授外從五位下。兼為因幡介。十二年授從五位下。遷為図書頭。因幡介如故。十四年。仁明天皇初在儲之日。遷東宮學士。因幡介如故。天長八年。勅与諸儒撰集古今文書。以類相從。凡有一千卷。名秘府略。九年兼為下總守。太子登祚之初。拜内蔵頭。下總守如故。数月遷為宮内大輔。承和元年。授從四位下。兼為相模守。二年遷為兵部大輔。六年兼為大和守。七年遷為大蔵卿。大和守如故。八年罷大和守。兼讃岐守。九年遷式部大輔。讃岐守如故。其秋拜参議。十一年春。捨城南宅為伽藍。名慈恩寺。貞主坐禪之餘。歷遊其間。時人慕之。其夏。上表讓式部大輔。不許焉。十二年陳便宜十四事。事多不載。議亦不行。……

恒柯。筑前守從五位下紀朝臣今守。有意執論。無力矯枉。未審虛実。唯得耳剽。臣不勝血誠。伏触逆鱗。言詞切直。默止不省。其秋為宮内卿。三年夏授正四位下。兼為相模守。……

国の護りであるべき太宰府の官吏らが本来の職務を忘れ、私利私欲に走っている。それを正すこともできない少貳と筑前守を名指しで批判し、帝の逆鱗に触れることも厭わず直言する正義漢でもある。

……仁寿二年春毒瘡發唇吻。詔賜医薬。中使相望於路。道俗來問者。日属街巷填咽。遣戒子孫云。殯斂之事。必從儉薄。徂歿之後。子孫齋供而已。卒于慈恩寺西書院。時年六十八。時人知与不知。莫不流涕愍惜。貞主天性慈仁。語恐傷人。推進士輩。随器汲引。……

不正を許さぬ厳しさはあったが、その人物の器量に従つた登用をする公正さも兼ね備えていたためか、貞主に対する人望は厚かった。仁寿二年(八五四)に貞主が死の床についたときは帝より医師や薬が下賜されたし、卒去すると巷は涙に暮れたという。

……長女繩子。心至和順。進退中規。仁明天皇殊加恩幸。生本康親王。時子内親王。柔子内親王。少女奥子

身長百八十センチを越える長身の貞主は、大同二年(八〇七)二十一才で文章生試に及第、四年後の弘仁二年(八一二)に少内記となった。以後、大内記、図書頭、宮内大輔、兵部大輔、大蔵卿、式部大輔を歴任し、承和九年(八四二)には参議に任ぜられて公卿となった。この間、ここに記された『秘府略』の撰集や「便宜十四事」を連ねたばかりではない。弘仁九年(八一八)の『文華秀麗集』、同十二年(八二二)の『内裏式』の編纂に加わり、天長四年(八二七)には『経国集』選定の中心ともなった。漢詩人としての能力は言うに及ばず、豊かな学識に支えられた実務家の面もあったようだ。

……嘉祥二年春兼尾張守。于時太宰府吏多不良。衰弊日甚。貞主上表曰。夫太宰府者。西極之大壤。中国領袖也。東以長門為閩。西以新羅為拒。加以九国二嶋。郡県闊遠。自古于今。以為重鎮。夫謀事必就祖。發政占古語。因檢旧記。大唐高麗新羅百濟任那等。悉託此境。乃得入朝。或緣貢獻之事。或懷帰化之心。可謂諸藩之輻湊。中外之関門者也。因茲有德為帥貳。才良為監典。若無其人。選取弁官式部。頃年以來。絶而不行。近得飛語云。彼吏或擊目閉口。似避時之人。或忘恥貧財。為聚斂之吏。府司国宰莫不悲傷。若如此不變。恐囑齊不及。臣聞此語。心神罔措。難此之飛語有何信拠。而臣子之理。何不預憂。又聞。少貳從五位下小野朝臣

頗有風儀。闡訓克脩。為天皇所幸。生惟彥親王。濃子
内親王。勝子内親王。時人以為。外孫皇子。一家繁昌。
乃祖慈仁之所及也。

貞主の卒伝は最後に二人の娘に触れて終わる。長女の繩子は父・貞主の良い氣質を受け継いだようで、穏やかで素直な性格と中庸な立居振舞で、殊に仁明天皇の寵愛を受けたという。

繩子がいつ仁明後宮に上がったかは分からない。ただ『続日本後紀』天長十年（八三三）五月二十九日条に「皇子年六歳者殤焉。侍女滋野氏所産育也。」という記事が見え、「侍女滋野氏」の脇には括弧書きで「繩子」とある。「侍女」という語は不審だが、女官のひとりとして天皇に近侍したことを指すのであろう。この夭折した皇子の生まれは天長五年（八二八）であるから、繩子の入侍は仁明が十四才で立太子した弘仁十四年（八二三）から五年以内だと分かる。

添臥には年上の女性が立つことが普通である。当時まだ公卿の娘ではなかった繩子が仁明の添臥に選ばれることは考えられないが、十代の年若い皇太子の後宮には、自ずと年長の女性たちが上がることが多かったと思われる。繩子も仁明より年長であった可能性は高い。しかし後述するように繩子所生の皇子女には数年から十年程度の年齢差があるから、繩子は仁明より年長だったとしても、やや年上、という程度であつたらう。

繩子所生の皇子女が初めて記録に見えるのは天長八年（八三一）、時子内親王の斎院卜定のときである。

賀茂斎内親王（脇に「有智内親王」と有）
令退出代。時子女王（脇に「仁明等九皇女」と有）
（注2）卜定之由。被申賀茂社。并奉幣。

『日本紀略』天長八年十二月八日
／括弧内は筆者注記

初代斎院・有智子内親王が二十二年間もの奉仕を終えたとき、後任として卜定されたのが時子である。父・仁明の即位前のことであり、未だ親王宣下前の「女王」であつた。時子は卜定時、恐らく乳児と言つても差し支えないような幼女であつたのではないだろうか。その誕生は天長五年（八二八）より後ではないかと思われる。夭折した同母の皇子とは、余り歳の離れていない兄妹だったのだらう。

時子が斎院の任にあつたのはほんの二年のことである。退下の記録も無いのだが、時子の後任である高子内親王の卜定記事が『続日本後紀』天長十年（八三三）三月二十六日条に見えるので、遅くとも三月初旬には退下が決まつたと思われる。父・仁明の踐祚は高子卜定の約一ヶ月前の二月二十八日である。初代斎院有智子内親王の例に倣えば御代替わりに当たつての斎院の交替はなく（注3）、時子内親王の斎院退下の理由は定かではない。初代斎院有智子内

親王も「齢老身安依」と言う、はっきりしたことは分からない理由で退下している（注4）。先代に倣つて、時子も退下理由を本人の病氣、とでもしたのであろうか。あるいは時子と同母の皇子がこの年の五月に亡くなつていることから、この皇子の容態に関連したことが退下理由であつたらうか。

退下後、時子には土地を賜つたという記録が『続日本後紀』に四回残されている。

賜讃岐国三野郡空閑地百餘町時子内親王。

（承和二年（八三五）七月十二日条）

河内国荒廃田八十五町賜時子内親王。

（承和二年（八三五）十月三十日条）

山城国綴意郡乘陸田二町。河内国荒廃田卅三町。賜時子内親王。

（承和三年（八三六）十一月二日条）

摂津国嶋上郡古荒田十八町八段賜時子内親王。

（承和十年（八四三）十一月十五日条）

どのような理由から土地を賜つたのかは不明であるが、仁明の内親王で土地を賜つた三人のうち、二人までが斎王であつた（注5）。時子は品位こそ授けられなかったが、

内親王としての禄に加えて賜つた土地からの収入もあり、比較的裕福であつたと考えられる。後見の外祖父・貞主は承和九年（八四二）秋に参議として公卿に連なるなど健在である。生活面での不安は皆無であつたと思われる。

しかし摂津の土地を賜つた四年後、時子内親王は承和十四年（八四七）二月十四日に若くして薨去している。

无品時子内親王薨。遣兵部大輔從四位下豊江王。彈正大弼從四位上橘朝臣永名。兵部少輔從五位下大和真人吉直。左京亮從五位下飯高朝臣永雄等。監護喪事。親王者。天皇之皇女也云々。
（『続日本後紀』）

仁明のごく若い時期に誕生した皇女だと考えても、時子は薨去時に二十四歳にはなつておらず、前述したように天長五年（八二八）より後の生まれであつたとすれば、亡くなつたのは二十歳前だった。同母の皇子が六歳で夭折していることもあり、あるいは時子内親王自身も病弱であつたのかも知れない。

さて、柔子内親王は『本朝皇胤紹運録』には「母同成康」とあるが、その頭注には『三代実録』の柔子薨伝を引いて「母三木正四位下滋野朝臣貞主之女、從四位上繩子也」とあり、時子内親王とは同母姉妹であることが分かる。

『続日本後紀』承和十五年（八四八）四月十四日条に、柔子成人の儀のことが見える。

本康親王及源朝臣冷於清涼殿冠焉。並天皇之遺體也。本康親王同産柔子内親王亦初笄焉。

時子薨去から一年二ヶ月後のことである。兄弟姉妹の服喪期間である三ヶ月は既に明けているが、当初の予定より一年遅れての儀式だった可能性もある。この柔子の初笄は、むしろ同母兄弟の本康親王、嵯峨天皇の遺児・源冷の初冠に付随したものであろう。本康も柔子も十二歳から十六歳程度であったと考えると（注6）、生年は天長十年（八三三）から承和四年（八三七）頃だったと思われる。生母の繩子が承和三年（八三六）四月三十日に无位から正五位下を授かったことが『続日本後紀』に見えるので、親王である本康の誕生はあるいはこの直前であったかも知れない。本康・柔子とも同母姉の時子より五歳から九歳程度年少であらう。いずれにせよ時子誕生のとくとは事情が異なり、本康と柔子は当代の天皇である仁明の子供として生まれたのである。

二人の成人を迎える頃になつても仁明はまだ帝位にあり、そのことが清涼殿に於いて初冠・初笄がなされた理由のひとつでもあったらう。父は天皇、外祖父は公卿、と皇子女にとってはこの上なく恵まれた環境の中での成人の儀

であつたと思われる。

その二年後、嘉祥三年（八五〇）に仁明天皇は崩御し、異母兄の文徳天皇が即位した。柔子内親王の後見であつた滋野貞主も仁寿二年（八五四）には卒去している。貞主は男子に恵まれなかつたようなので（注7）、弟の貞雄が中心となつて柔子の後見をしていたと考えられる。

その貞雄も貞観元年（八五九）十二月二十二日には卒去し、柔子内親王の後見は同母兄弟の本康親王に託されたと思われる。貞雄卒去の翌年からは本康親王の任官・授品の記録が正史に見えるようになる。その最初の記録である『三代実録』貞観二年（八六〇）二月十四日条には、本康を弾正尹に任官されたことが記されているが、そのとき既に四品行上総太守であつた。貞観五年（八六三）二月には兵部卿を拜命し、同母兄弟の柔子内親王を後見するの何ら不安は無かつたと思われる。

また当帝・文徳は後宮に滋野氏出身の女性を二人入れている。一人は柔子の生母・繩子の妹で「頗有風儀。閭訓克脩。為天皇所幸。」と讃えられて三人の親王・内親王を産んだ奥子であり、もう一人は貞主の弟・貞雄の娘で源氏に臣籍降下された四人の皇子女を産んだ岑子である。滋野氏出身の皇妃が寵幸を得ていたことから、文徳も異母妹・柔子内親王を忘れることはなかつたと思われる。

柔子内親王が薨去したのは貞観十一年（八六九）二月二十八日のことである。

无品柔子内親王薨。不任縁葬諸司。以喪家固辞也。帝不視事三日。内親王者。仁明天皇之女。母參議正四位下滋野朝臣貞主之女。從四位上繩子也。（『三代実録』）

柔子が前述したように天長十年（八三三）から承和四年（八三七）頃の生まれとすれば、三十代前半で生涯を終えたことになる。

生母である繩子は柔子薨去のとき存命であつたか否かは不明だが、位階はいつしか正五位下から從四位上へと昇叙されている。昇叙の契機としては承和十五年（八四八）の本康・柔子の初冠・初笄の時期が相応しいように思える。仁明帝時代の昇叙であるとすれば、繩子は愛情面はもとより皇后候補とまでは行かないまでも、後宮でかなり重きをなす存在だったことがうかがわれる。

時子内親王にせよ、柔子内親王にせよ、経済的・社会的には安泰であつたと見て差し支えないであらう。二人の内親王の人柄を偲ぶ縁はないが、「雅有度量」「天性慈仁」と称された外祖父・貞主、「心至和順」「進退中規」と称された生母・繩子、「頗有風儀」「閭訓克脩」と称された叔母・奥子の形容から、その輪郭を想像するばかりである。

注1（『三代実録』貞観元年（八五九）十二月二十二日条）

從四位上行摂津守滋野朝臣貞雄卒。貞雄者。右京人也。父從五位上家譚。延暦十七年改伊蘇志臣。賜滋

野宿祢。弘仁十四年改宿祢賜朝臣。貞雄。是家譚之第三子也。身長六尺餘。雅有儀貌。幼遊大学。頗閑詞賦。弘仁七年為主殿少属累遷掃部權充。右衛門少尉。嵯峨天皇徵貞雄近侍。恩寵稍重。自右衛門少尉。遷掃部助。兼左近衛將監。天長四年授從五位下。除備前權介。承和五年改權為正。其年授從五位上。押少納言。兼侍從。十二年出為丹波守。加正五位下。嘉祥三年授從四位下。押但馬權守。天安二年為摂津守。貞観元年進從四位上。女從五位上岑子。文徳天皇納之。誕二皇子二皇女並賜姓源朝臣。貞雄職歷數国。殊蹟無聞。為性仁愛。与物無競焉。卒時年六十。五。（太線部は筆者による）

注2「仁明等九皇女」の「等」は「第」の誤記と思われる。しかし『日本紀略』以外の『中右記』『一代要記』『帝王編年記』といった史料は、時子を第一女とする。仁明帝には内親王が九人ある。時子は同母妹に柔子内親王がいるので、第九皇女の可能性は無い。不審である。

注3「皇女総覧（六）」有智子内親王

注4注3に同じ
注5土地を賜った三人の仁明皇女は時子内親王（生母・

滋野貞主女繩子、高子内親王（生母・百濟王教俊女永慶）、親子内親王（生母・藤原三守女貞子）。このうち、時子と高子は賀茂斎院に卜定されている。

注6 平安時代も中期になると十二歳になるのを待つようにして加冠・装束の式を行うが、この当時はやや遅かったように思われる。『本朝皇胤紹運録』に拠れば本康・柔子の父・仁明は十四歳、異母兄弟の文徳と光孝は十六歳、甥に当たる文徳の皇子・清和と陽成は十五歳である。

注7 拙論前半に掲げた貞主卒伝には、貞主の子供として名前が挙がっているのは繩子・奥子の二人の娘だけである。

（柳澤 理恵子）

●史料 文頭の数字は西暦、（ ）内は筆者による。

【時子内親王】母、滋野繩子（貞主女）／
同母兄弟姉妹、本康親王・柔子内親王／最終位、无品

831（天長八年十二月八日）賀茂斎内親王（脇に「有智内親王」と有）齡老身安依天令退出前代。時子女王（脇に「仁明等九皇女」と有）卜定之由。被申賀茂社。并奉幣。

（『日本紀略』）

時子内親王（母同本康承和十四年二月薨）（『一代要記』）

時子女王（仁明天皇守器之時第一女）（『帝王編年記』）

時子内親王（母同本康賀茂斎院）（『帝王編年記』）

時子内親王（母同本康。）（『皇胤系図』統群書類従本）

時子内親王。（『皇代記』群書類従本）

仁明天皇第九皇女也。母曰滋野繩子。貞主女也。天長八年十二月卜定。遣参議正四位下藤原愛發于賀茂神社告事由。（『賀茂斎院記』）

時子（淳和、仁明（御時）、仁明一女）

（『中右記』大治二年（一一二七）四月六日条。

恂子内親王の卜定に伴う、日記中の斎院次第）

【柔子内親王】母、滋野繩子（貞主女）／

同母兄弟姉妹、本康親王・時子内親王／最終位、无品

848（承和十五年四月十四日）本康親王及源朝臣冷於清涼殿冠焉。並天皇之遺體也。本康親王同産柔子内親王亦初筭

835（承和二年七月十二日）賜讃岐国三野郡空地百餘町時子内親王。（『続日本後紀』）

835（承和二年十月三十日）河内国荒廃田八十五町賜時子内親王。（『続日本後紀』）

836（承和三年十一月二日）山城国綴意郡乘陸田二町。河内国荒廃田卅三町。賜時子内親王。（『続日本後紀』）

837（承和十年十一月十五日）摂津国嶋上郡古荒田十八町八段賜時子内親王。（『続日本後紀』）

847（承和十四年二月十二日）无品時子内親王薨。遣兵部大輔從四位下豐江王。彈上大弼從四位上橘朝臣永名。兵部少輔從五位下大和真人吉直。左京亮從五位下飯高朝臣永雄等。監護喪事。親王者。天皇之皇女也云々。

（『続日本後紀』『日本紀略』）

時子内親王（斎院。母同本康）（『本朝皇胤紹運録』）

時子内親王（仁明第一女母從四位上滋野綱守（注「子イ」）参議貞主女也承和十四年四月薨）（『一代要記』）

焉。（『続日本後紀』『日本紀略』）

869（貞観十一年二月二十八日）无品柔子内親王薨。不任縁葬諸司。以喪家固辞也。帝不視事三日。内親王者。仁明天皇之女。母参議正四位下滋野朝臣貞主之女。從四位上繩子也。（『三代実録』『日本紀略』）

柔子内親王（母同成康）

（『本朝皇胤紹運録』但し頭注には「母三木正四位下滋野朝臣貞主之女、從四位上繩子也」とある）

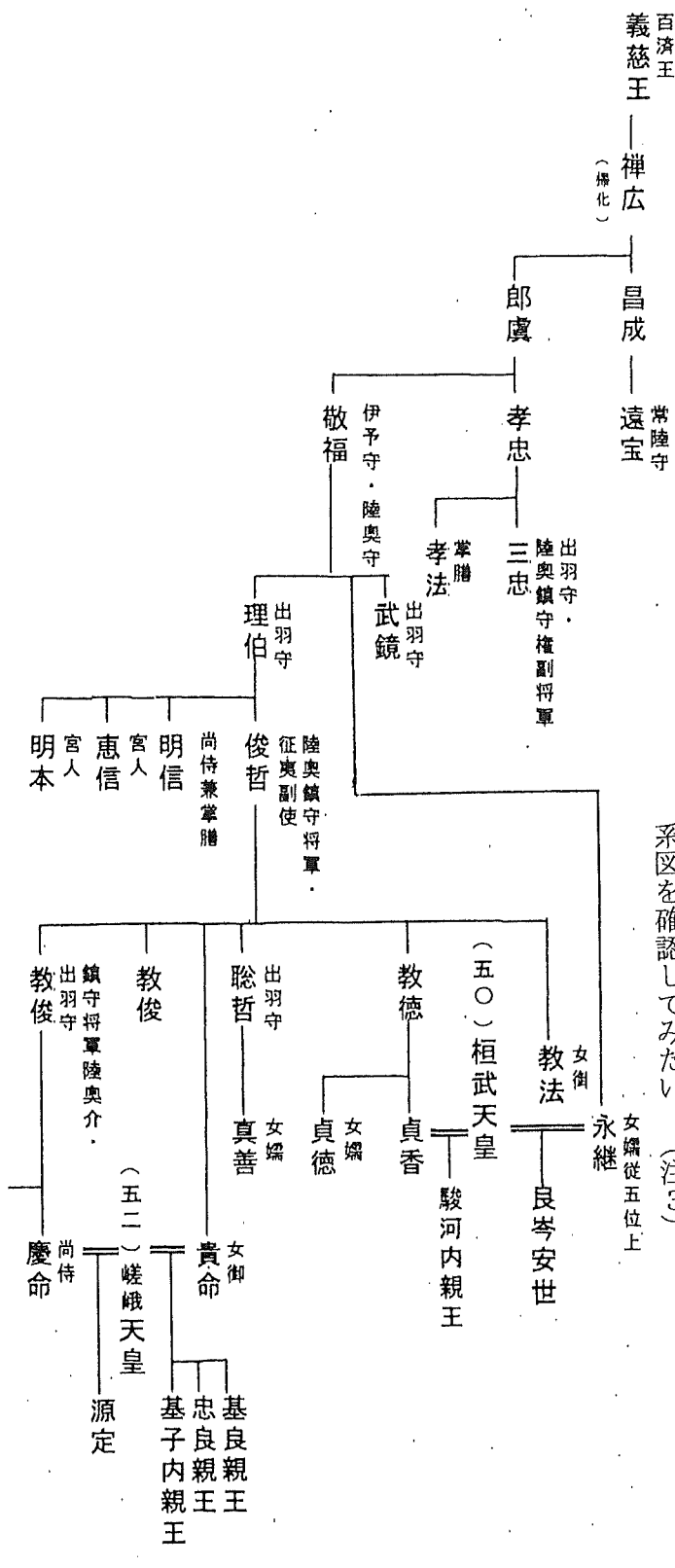
柔子内親王（母同本康。）（『皇胤系図』統群書類従本）

柔子内親王（母同貞観十一年二月十八日薨）（『一代要記』）

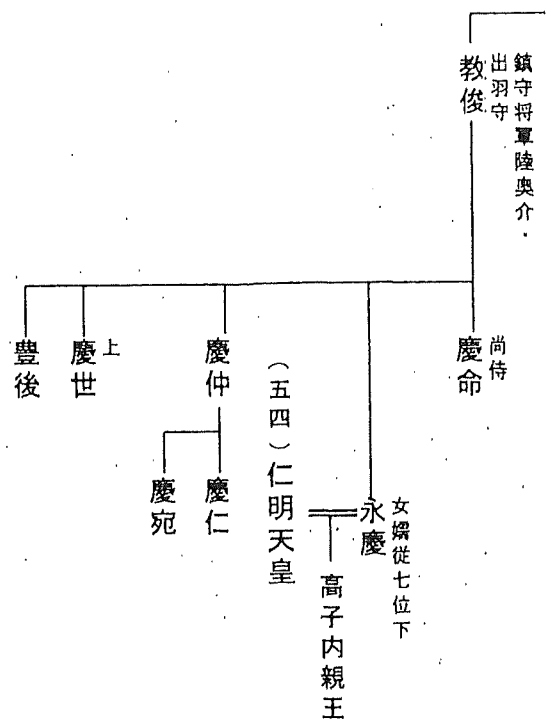
柔子内親王。（『皇代記』群書類従本）

高子内親王

百済王氏の流れをくむ女性たちが桓武朝から嵯峨朝にかけて、後宮での重要な地位にいたり、女御として皇子・皇女を生んだりしていることは嵯峨天皇皇女、基子内親王の考察の中ですでに詳しく述べている(注1)。又、今井啓一氏の「天子後宮における百済王氏の女人」に、詳細に述べられていることでもある(注2)。



仁明朝においても尚侍慶命の妹である女孀永慶が高子内親王を生んでいるが、永慶が従七位下を賜った女孀であると示されているのは百済王の子孫といわれる三松家の、「三松家系図」のみで、正史にはみえない。この「三松家系図」は、『平安博物館研究紀要』第七輯の藤本孝一氏の史料紹介に見えるもので、角田文衛氏が「古代史研究上、特に渡来人、後宮等に重要な史料価値を有している」と言われたという系図である。改めてこの「三松家系図」を参考にして百済王氏の系図を確認してみたい。(注3)



さて、系図の中に永慶と一字違いの永継という名を見つけていることが出来るが、その読みは『六国史索引』で「ヨウケイ」としてある。栗原弘氏の「百済永継(藤原冬嗣母)」について(注4)に詳しいが、永継は下級女官の女孀であった。『公卿補任』では

藤冬嗣 母同真夏(一本母女孀従七位下百済宿禰永継

所生)

良岑安世 母女孀従七(五イ)位下百済宿禰永継所生焉。

とあり、官位は従七位下か、あるいは従五位下とも言える。「三松家系図」では従五位上である。永慶も「ヨウケイ」と読みうるので、系図における永慶の位もあるいは永継との混同で後に記された可能性も考えられる。先にも述べたが「三松家系図」で永慶は従七位下で、系図作成にあたりその「三松家系図」に負うところが多いという、角田文衛氏の「百済王代系図」(注5)には従五位下とある。しかし、国史の中に永慶の資料がないので、正確な官位は不明である。ともかく永慶が下級女官として宮中に上ったのはおそらく姉慶命との関わりであり、それは内侍司の女孀であったろうか。低い地位にもかかわらず仁明天皇の目にとまり、皇女を生んだが、官位が上る前に若くしてこの世を去ったのかも知れない(注6)。高子内親王が齋院になったあと、伯母にあたる慶命が尚侍に任じられているので、永慶も存命中なら、正史に残るような官位を得たことであろう。

高子内親王は天長十年三月二十六日に賀茂齋院に卜定され、十七年間在任し、父仁明天皇の崩御にともない、嘉祥三年三月二十一日に退下した。薨じたのは貞観八年六月十六日であるが、その間、正史の中に表れる記事は

天長十年（八三三）三月二十六日条「高子内親王為賀茂齋院」（続日本後紀）

天長十年（八三三）四月十日条「遣參議從四位下右大弁藤原朝臣常嗣。奉幣於賀茂大神。告以高子内親王定齋院之狀。」（続日本後紀）

承和二年（八三五）四月二十日条「高子内親王禊于賀茂川。始入齋院。」（続日本後紀）

承和三年（八三六）十一月八日条「山城國久世郡空閑地二町賜高子内親王。」（続日本後紀）

貞觀八年（八六六）六月十六日条「无品高子内親王薨。喪家固辭。故不任緣葬之司。輟朝三日。内親王者。仁明天皇之皇女。母百濟王氏。從五位上教俊之女也。承和初。卜為賀茂齋。仁明天皇崩後傳齋歸第焉」（三代実録）

承和十二年（八四五）正月二十八日条「山城國公田一町二段賜亮子内親王」（続日本後紀）
（頭注に、「『京都御所東山御文庫本』では「高」の字になっている」とあることと、他の史料に亮子内親王がないことから高子内親王のことと思われる。）

であるが、年令などは不明である。

高子内親王の父である正良親王（仁明天皇）が東宮に立太子したのが弘仁十四年（八三三）で、十四歳の時であるから、父となりうる年令から想像しても、これ以降に生まれたものと考えられる。

仁明天皇即位の際、高子内親王が齋院に、久子内親王（母、高宗女王）が齋宮に卜定された。この齋院、齋宮の同時卜定はこの時が最初であった。初代齋王有智子内親王の卜定年令が四歳位であったことから、また、桓武朝の朝原内親王が齋宮に卜定されたのが三歳、そして布勢内親王が七、八歳だったことから高子内親王も三、四歳から十歳弱位だったと考えられ、その生年は天長年間の前半と言えるであろう。

次に、九人の内親王（注7）のうち、なぜ久子内親王と高子内親王が選ばれたのかを考えてみたい。まず、生母が有力貴族の藤原氏の皇女達は、手元から放したくないという理由から避けられたことだろう。滋野朝臣繩子所生の時子内親王は淳和期の齋院であったし、第二子の柔子内親王は生まれていなかった可能性が非常に高い（前項時子内親王参照）。そこで残るのが、高子内親王と久子内親王で、母高宗女王が王氏の出である久子内親王が天皇家の祭祀をする伊勢の齋宮になり、都を守護する賀茂の齋院に高子内親王がなったと考えられる。

ところで、『続日本後紀』天長十年四月一日条の

「天皇御紫宸殿。賜侍臣酒。音樂之次。右京大夫從四位下百濟王勝義奏百濟國風俗舞。晚頭酒罷。賜四位已上御被。五位御衣。」

の記事が興味深い。どういう宴会だったか分からないが、百濟王氏ゆかりの高子内親王が齋院になったお祝いの舞いを百濟王勝義が舞ったのだろうか。卜定が三月二十六日、その六日後のことだけに場面が目につかぶようである。

卜定の六年後、承和六年（八三九）正月二日に百濟國貴須王から出た菅野永岑が齋院長官となり、その八年後の承和十四年（八四七）十二月十四日に百濟王慶世が齋院長官となっている。この慶世は「慶」の字が共通していることから慶命、永慶と同母の姉弟（或いは兄妹）であろう。しかし、嘉祥三年（八五〇）の仁明天皇崩御に伴う高子内親王齋院退下で慶世も散位となってしまうのだから短い在任期間であった。

次の文徳期に、紀静子所生の述子内親王が齋院に立てられた際、ほとんど同時期に従五位下紀朝臣冬雄が齋院長官になったことが『文徳実録』に記されている。

天安元年二月二十八日条「廢鴨齋内親王惠子。更立尤无品述子内親王為齋内親王。」

天安元年三月二日条「從五位下紀朝臣冬雄為齋院長官」

これは、高子内親王の時の例で、一族から長官を出す方がいると都合がよいということになったのかもしれない。このことだけに限らず、三代目の高子内親王の時はまだ体制が整っておらず、代が下るに従ってだんだん整っていったことと思われる。

嘉祥三年（八五〇）に齋院を下りてから貞觀八年（八六六）に薨ずるまでの十六年間、高子内親王の日々は一体どんなものであったのだろうか。伯母の慶命は嘉祥二年（八四九）にすでに薨じたが、慶命の子源定が貞觀五年（八六三）まで生きていたので、後見人であった可能性が高い。又は、齋院長官の百濟王慶世、もし慶世亡き後なら、その子俊房ということになるだろうか。慶世は貞觀元年、清和天皇の詔により次侍從に任じられている。あるいは、永慶や慶世と同母と考えられる慶仲の子、慶仁、慶宛もいるので、いずれにせよ一族の庇護の元にあったことであろう。

薨去の際の記事は「喪家固辭。故不任緣葬之司。輟朝三月。」である。この年は、地震や干ばつなど天変地異で世情がかわたたくしく、この月の月次祭も取りやめになっていることから葬儀も辞したのかとも思われるが、その前に薨じた仁明皇女重子内親王、桓武皇女大井内親王の例から、この頃はすでに

清和朝になっていたもので、関係の薄い皇女は葬儀を辞すのが慣例だったと考えられる。

貞観七年七月二日条「無品重子内親王薨。依内親王平生辞讓。不任縁葬諸司。輟朝三日。」

(三代実録)

貞観七年十一月二十八日条「無品大井内親王薨。不任縁葬司。以喪家固辞也。帝不視事三日。」(三代実録)

高子内親王は生前、山城國などの空閑地や公田を賜っている(注8)。仁明皇女で賜田されているのは時子内親王、親子内親王、高子内親王だが、なぜこの三人なのか理由は定かでない。あるいは他の皇女達も賜田していたが、記録に残っていないだけなのかもしれない。又、薨去のあと、高子内親王が残した土地の所有権を巡って九州、観世音寺との争いがあったことが『平安遺文』の中に見られるが(注9)、どのような解決を見たのかは分からない。

一族の女性達が何代にもわたって宮中で活躍する環境で幼い時を過ごし、齋院退下後は、華々しかった百済王氏の力がだんだん弱くなっていく寂しさの中で、静かに過ごした四十年前後の高子内親王の生涯であったことと思われる。『三代実録』によれば、その最期の日にも京に地震があった。

- (注1) 皇女総覧(十) 基子内親王(『瞿麦』第八号)
- (注2) 『百済王敬福』(綜芸舎、昭和四十年)
- (注3) 藤本孝一氏「三松家系図―百済王系譜―」(『平安博物館研究紀要』第七輯、昭和五十七年)
- (注4) 『文化史学』第四十五号(文化史学会、平成元年)
- (注5) 『日本の女性名』(教育社、昭和六十三年)
- (注6) 『後宮職員令』によると、女孺に該当する官位は小初位であり非常に低い。皇女を生んでいれば官位が上がると考えられるので、三松家の系図に女孺と残っていることから、若くしてこの世を去ったものと思われる。
- (注7) 『平安時代史事典』「平安要覧」(角川書店)
- (注8) 『土地制度史I』第二章「律令制的土地制度」宮本敦氏(山川出版社、昭和五十二年)
- (注9) 一五四 高子内親王家莊牒案
一五七 筑前國牒案
一五八 観世音寺牒案
一六〇 内蔵寮博太莊牒
一六一 太宰府符案
一六二 太宰府田文所検田文案

(恵 比呂美)

●史料 文頭の数字は西暦、()内は筆者による。

【高子内親王】母、百済永慶(教俊女)／最終位、无品

833 (天長十年三月二十六日) 高子内親王為賀茂齋院 (『続日本後紀』)

833 (天長十年四月十日) 遣参議從四位下右大弁藤原朝臣常嗣。奉幣於賀茂大神。告以高子内親王定齋院之状。 (『続日本後紀』)

835 (承和二年四月二十日) 高子内親王禊于賀茂川。始入齋院。 (『続日本後紀』)

836 (承和三年十一月八日) 山城國久世郡空閑地二町賜高子内親王。 (『続日本後紀』)

866 (貞観八年六月十六日) 无品高子内親王薨。喪家固辞。故不任縁葬之司。輟朝三日。内親王者。仁明天皇之皇女。母百済王氏。從五位上教俊之女也。承和初。卜為賀茂齋。仁明天皇崩後停齋歸第焉。 (『三代実録』)

875 (承和十二年正月二十八日) 山城國公田一町二段賜亮子内親王 (『続日本後紀』)

高子内親王(齋宮。母百済氏) (『本朝皇胤紹運録』)

齋院 亮子内親王(帝八女承和二年四月加茂斎母百済永慶從五位上教俊女也嘉祥三年三月退之貞親八年六月十六日薨) (『一代要記』)

高子内親王(賀茂齋院／母百済永慶從五位上教俊女也) (『帝王編年記』)

高子内親王。 (『皇代記』群書類従本)